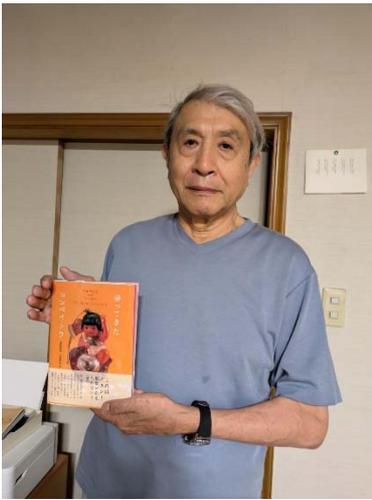


帰ってきたコンペイトウ

以前に「いろはにコンペイトウ」を執筆され、さらにサロン 42 を担当されました栗原英次さんが同年齢(1943 年生)、同業(歯科医師)で 50 年来の付き合いをされている入山喜良さんと「帰ってきたコンペイトウ」という労作を上梓されました。今回は、この労作について述べたいと思います。



栗原英次さん



50 年前の兩人



現在(ともに左:栗原さん、右入山さん)

コンペイトウはサロン 43 で述べました通り 1569 年にルイス・フロイスが織田信長に献上したのが最初だとされています。当時の物は今と製造方法が違っているので形もはっきりとしたものではなく、大きさも数倍大きかったのです。日本で作られるようになったのは井原西鶴が「日本永代蔵」に「長崎の商人がコンペイトウを作って一代で長者になった」と書き残しているのが元禄時代には作られていました。これが全国に広がっていったのです。



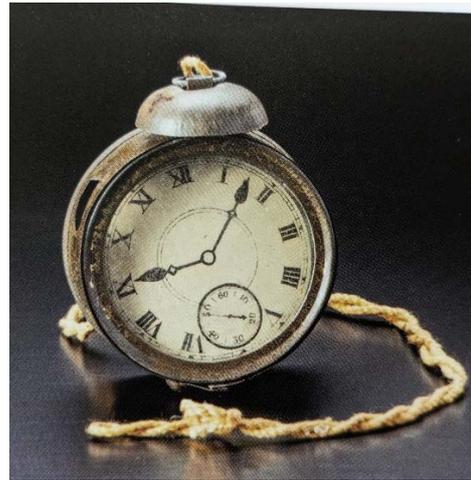
ポルトガルのコンペイトウは日本製よりも大きい

コンペイトウの独特の形ですが、徳川将軍家への献上品は 36 本の角があるのを理想として役人が一つ一つ検査して不良品は撥ねて自分の物にしていたそうです。文字通り「甘いものにたかって」いたわけで、何やら今の時代と同じですね。

ご二人のコレクションは収集歴 50 年を誇るだけに乗り物、時計、水筒、動物、植物などバラエティーに富んでいます。また日英同盟、満州国、日独伊三国同盟、幻となりました東京オリンピックなど時代状況を現わしたものもあります。種類だけでなく数も多く一つの博物館が出来るほどです。



バス型



時計は珍しい金属製



水筒型はコンペイトウが入っている



玉押し猫はブリキ製玩具が大量生産された

材質もガラス、紙、金属など多岐に渡っていますが、その中で特にセルロイドを取り上げています。セルロイドは色合いが鮮やかで加工が容易、さらにどことなくはかなげなので単体のままでも、ガラスなどと組み合わせてもコンペイトウの容器として適していたのです。

飛行機、軍艦、動物、赤穂浪士、桃太郎、そしてセルロイドと言えばこれだと思ってしまうキューピーなどをコンペイトウ容器としていますが、何れもどことなく明るさが感じられます。栗原さんは明るさと薄くて壊れやすい繊細さが魅力だと言われていますが、言い得て妙な表現です。



日英同盟(註 1)



三国同盟(註 2)



幻の五輪(註 3)



セルロイドといえばこれだと思うキューピー2点

「帰ってきたコンペイトウ」の魅力は私の筆力では申し上げることが出来ません。ぜひともご購入していただきたいものです。立東社の発行で税込み 2475 円ですが、この価格以上の値打ちがあると保証いたします。電子出版もありますのでそちらも面白いと思います。

最後になりましたが、ここに掲載しました各写真の掲載を快諾していただきました栗原さんに心よりの謝意を表します。

註 1:日本とイギリスが 1902 年に結んだ同盟

註 2:日本とドイツ、イタリアが 1940 年に結んだ同盟。左の容器の旗は上から日本、ドイツ、イタリア。右の旗は上から冀東防共自治政府(1935~1938 年に中国河北省に存在した政府。存在期間が極めて短いため珍品である)、旭日旗、満州国

註 3:日本は 1940 年に東京オリンピックを開催する予定だったが戦争により 1937 年に返上した。その後、ロンドンさらにヘルシンキと開催地が変更され結局中止となった。